

前田夕暮 略年表

1883 (明治 16)	0 歳	7月27日、神奈川県大住郡南矢名村に三男四女の長子として生まれる (本名 洋造 父・久治 母・イセ)
1890 (明治 23)	6 歳	大根小学校に入学
1898 (明治 31)	15 歳	中郡共立学校 (現: 秦野高校) に入学
1899 (明治 32)	16 歳	神経衰弱のため中郡共立学校を休学 (のち退学)
1902 (明治 35)	19 歳	東北へ旅行の際、与謝野晶子の歌集『みだれ髪』を携行し文学的開眼が行われる
1904 (明治 37)	21 歳	父を説得し上京。尾上柴舟に入門 国語伝習所 二松学舎に学ぶ
1905 (明治 38)	22 歳	車前草社 (尾上柴舟) 創立 正富汪洋・若山牧水・三木露風・有本芳水と参加
1906 (明治 39)	23 歳	白日社を興す
1907 (明治 40)	24 歳	雑誌『向日葵 (ひぐるま)』を白日社で創刊
1910 (明治 43)	27 歳	歌集『収穫』を易風社から刊行 栢野繁子 (筆名 狭山信力) と結婚
1911 (明治 44)	28 歳	雑誌『詩歌』を白日社で創刊
1914 (大正 3)	31 歳	長男・透が誕生 歌集『生くる日に』を白日社から刊行
1917 (大正 6)	34 歳	父・久治が死去
1918 (大正 7)	35 歳	長女・妙子が誕生。雑誌『詩歌』を廃刊
1919 (大正 8)	36 歳	亡父の山林事業を継承 事業地を秩父小森川水源地带へ移す
1923 (大正 12)	40 歳	歌壇復帰を宣言。北原白秋と再会
1924 (大正 13)	41 歳	白秋らと雑誌『日光』創刊
1925 (大正 14)	42 歳	散文集『緑草心理』をアルスから刊行
1926 (大正 15)	43 歳	散文集『煙れる田園』をアルスから刊行
1928 (昭和 3)	45 歳	雑誌『詩歌』を復刊
1929 (昭和 4)	46 歳	東京朝日新聞社の招きにより小型機に搭乗し 初飛行…自由律へ踏み出す
1932 (昭和 7)	49 歳	歌集『水源地帯』を白日社から刊行
1936 (昭和 11)	53 歳	長女・妙子が肺結核により死去 (18 歳)
1940 (昭和 15)	57 歳	歌集『青楓は歌ふ』を白日社から刊行
1943 (昭和 18)	60 歳	歌集『烈風』を鬼沢書房から刊行…定型復帰 歌集『富士を歌ふ』を明治美術研究所から刊行
1945 (昭和 20)	62 歳	空襲激化のため秩父入川谷へ疎開
1946 (昭和 21)	63 歳	歌集『新頌・富士』を富告本社、 歌集『耕土』を新紀元社から刊行
1951 (昭和 26)	67 歳	4月20日、結核性脳膜炎により死去 「短歌研究」に遺詠「わが死顔」を発表 『夕暮遺歌集』を長谷川書房から刊行

記念スタンプ

アクセス

小田急線秦野駅から  
〈神奈中バス〉  
秦08 渋沢駅北口行「文化会館前」下車すぐ  
秦11 高砂車庫前行「カルチャーパーク前」下車、徒歩10分  
小田急線渋沢駅から  
渋沢駅北口から徒歩20分  
〈神奈中バス〉  
秦08 秦野駅行「文化会館前」下車すぐ  
秦12 秦野駅行「カルチャーパーク前」下車、徒歩10分

開館時間

水～日 (祝日除く) 9:00～19:00 / 火・祝 9:00～17:00

休館日

- ・月曜日 (祝日の場合は開館し、その翌平日が休館)
- ・資料整理休館日 (原則、各月最後の金曜日)
- ・年末年始

入室料 無料

※図書館の開館状況について、詳しくはホームページをご確認ください。

前田夕暮記念室 (秦野市立図書館内)

〒257-0015 神奈川県秦野市平沢 94-1  
TEL 0463-81-7012

HADANO LIBRARY



前田夕暮記念室

MAEDA YUGURE memorial room



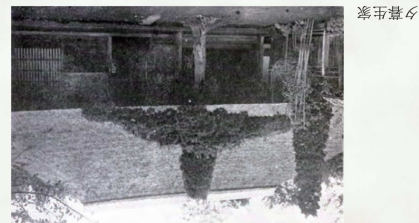
夕暮は生涯に数回作風の転換を図っており、当初は浪漫主義的な歌風ですが、自然主義的な作品や、西洋面に影響を受けた作品なども詠みました。また、定型のみならず自由律への飛躍など、さまざまな歌風を展開したのが特徴で、生涯に20冊以上の歌集を残しています。

夕暮の作風

夕暮の活躍



与謝野晶子の『みだれ髪』に影響を受けた夕暮は、雑誌『詩歌』を創刊すると多くの新人を歌壇に送り出し、高村光太郎、山村暮鳥、萩原朔太郎ら詩人たちに活躍の舞台を提供しました。昭和4年には新聞社の招きにより当時まだ珍しかった飛行機に搭乗し、斎藤茂吉・土岐善麿・吉植庄亮と共に「空中競詠」に参加しています。



夕暮生家

前田夕暮は明治16年7月27日、南矢名に生まれました。本名は洋造。前田家は南矢名の「油屋」の屋号を持つ豪農で、夕暮は三男四女の長子。父・久治は神奈川県議会議員。大根村長を務めた人物。夕暮は大根小学校を卒業後、中郡共立学校 (現: 県立秦野高校) に学ぶが、神経衰弱を理由に2年1学期で退学。その後、大磯の天野快三医院に預けられる。19歳までの少年時代を秦野の地で過ごした。

夕暮と秦野

(大正15年刊行 散文集『煙れる田園』序より)

—私は幸ひにして郷土をもつて居る。私は草木土壌の香気のなかに、山野村落の間に生れた。これは私にとって今にして思へば何物にもかへがたき寶である。—





